

第2節 史跡郡山城跡の概要

(1) 構造

郡山城は城絵図が多数残っており、近世後半の構造を具体的に知ることができる。現在知られている最も古い城絵図は、第一次本多期の作となる『和州郡山城絵図』（正保年間）である。以降の時期の城絵図は柳澤期が特に充実しているが、城郭の構造は正保以降大きく改変されていないことがわかる。正保以前を伝える史料はほとんどないが、古相の石垣や築城初期の遺構分布状況から、豊臣期には現存する城郭の構造がほぼ整っていたとみられる。

①総構え

城郭は、奈良盆地北西部に位置する西ノ京丘陵とその東縁低地部に築かれた、内堀、中堀、外堀からなる総構えの構造である。城郭中心部の大部分が丘陵上に位置する。丘陵部と周辺低地部との比高差は約20mで、丘陵上に中心曲輪群と武家屋敷地、低地に城下町を配置する。奈良や大坂につながる街道に近い要衝で、京都をはじめ畿内の要所に連絡することができる。

城郭の外郭を構成する外堀に8箇所の虎口を設け、そのうち4箇所に九条町大門、鍛冶町大門、高田町大門、柳町大門の大門を設けた（九条町大門は近世初期に破損して撤去）。奈良・京都からは鍛冶町大門を通り城内に入る。外堀は、東西幅が最大約1.6km、南北幅が最大約1.5kmあり、西半は丘陵地に、東半は低地に位置する。丘陵地では築城前の溜池に由来すると考えられる部分と、斜面地を削り出した部分を連結して堀を形成し、場所によって空堀となる。低地部はほとんどが水堀で、東辺は秋篠川の流路を利用したと伝わる。堀の内側には高さ1間半から2間半の土塁が築かれた。城郭に伴う水系は、大部分が近代以降も踏襲された。

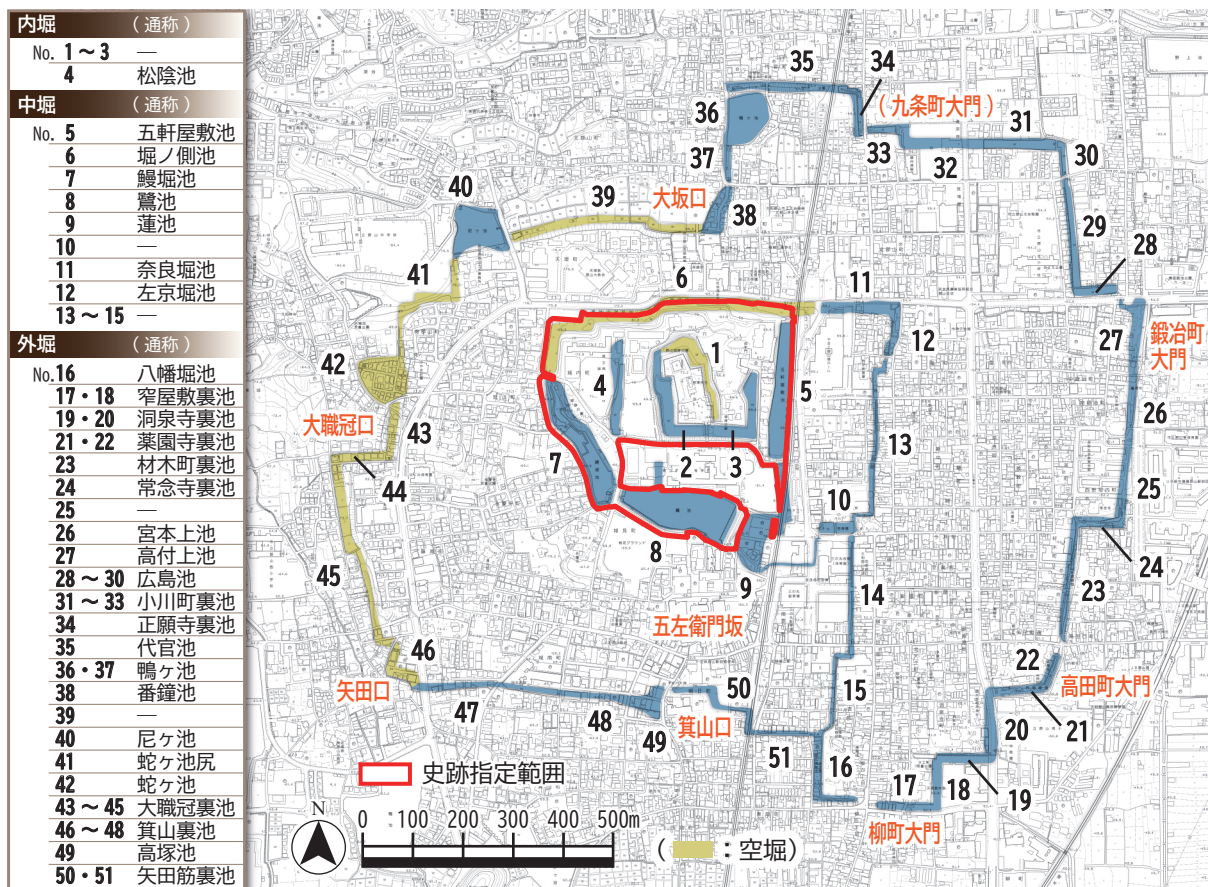


図 3-3 郡山城の構造 -1 (総構え・虎口)

(S=1/15,000)

②城郭中心部の曲輪

城郭中心部の曲輪群は、図 3-4 に示すような、本丸を中心に周囲に曲輪が連結する輪郭式の構造で、各曲輪を内堀や中堀で取り囲む。丘陵地形を活かした立体的な配置である。

以下に各曲輪の特徴を示す。曲輪や櫓、門の名称は、近世後半の柳澤期を基本とする。

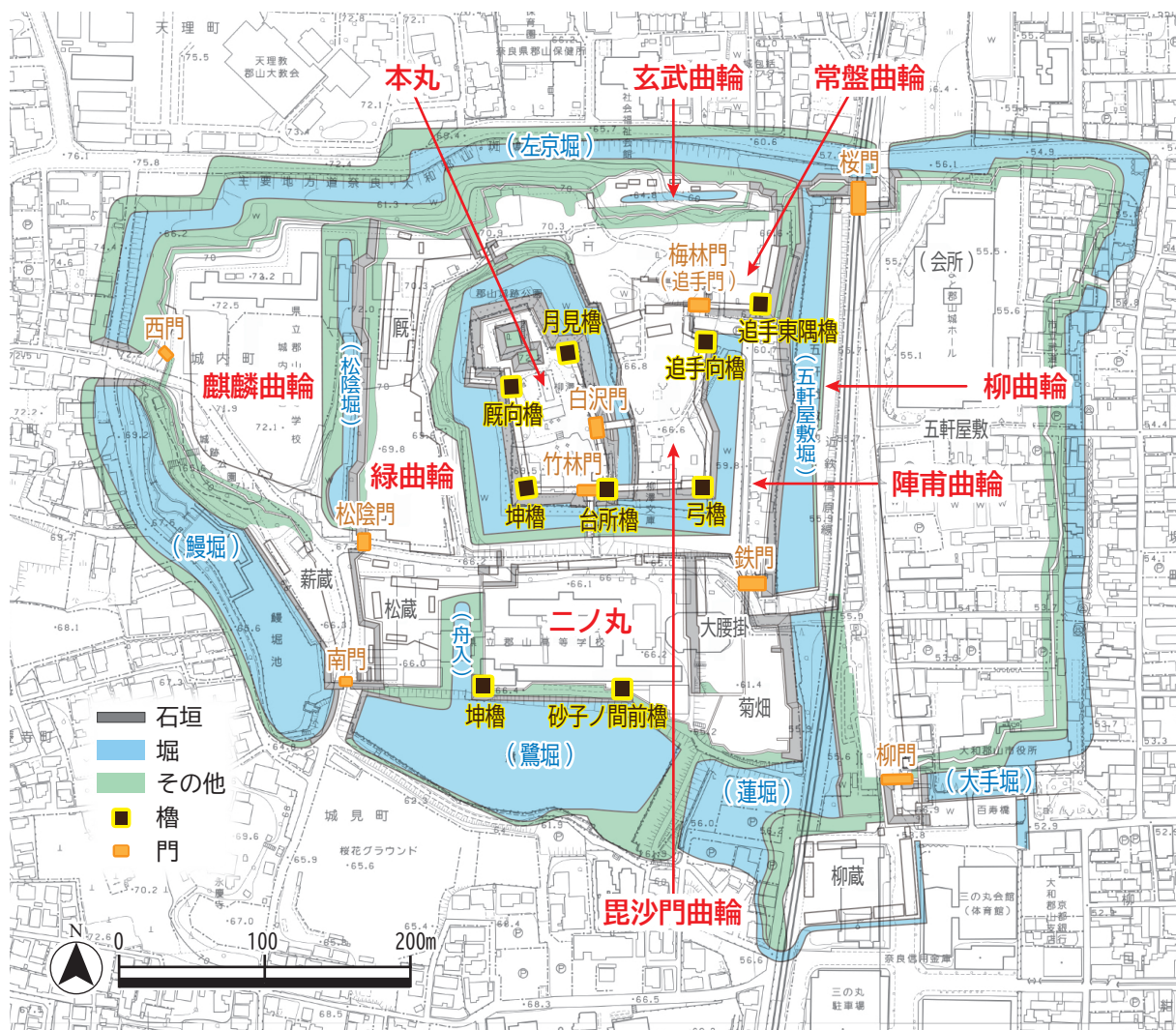


図 3-4 郡山城の構造 -2 (曲輪と櫓・門)

(S=1/ 5,000)

■本丸

城郭のほぼ中心に位置し、周囲を内堀がめぐる。曲輪には東辺の極楽橋、南辺の竹林橋より出入りする。極楽橋には表門である白沢門が、竹林橋には竹林門が取りつく。曲輪のほぼ中央に約 1.5m の高低差を設け、曲輪内を南北 2 区画に区分する。曲輪の周囲には高さ 10m 前後の石垣を築き、塁線上に多聞や土塀を設ける。曲輪の北端部に天守台が位置する。豊臣期には天守があったが、近世の城絵図には天守を描くものがない。曲輪の各辺には、月見櫓、白沢門、竹林門、坤櫓、厩向櫓を設ける。

■毘沙門曲輪・常盤曲輪・玄武曲輪

本丸から内堀を介して東部に位置する曲輪群である。

毘沙門曲輪は、近世前半は二ノ丸や二ノ曲輪と称されていたが、柳澤期に毘沙門曲輪に改められた。北以外の三方に内堀がめぐり石垣を築く。南辺と東辺の塁線上に多聞を築き、南東隅に弓

櫓、北東隅に追手向櫓を配する。曲輪内には、北辺の久護門から入る。曲輪の南西隅に本丸と連絡する陸橋を設けて、多聞を築く。

常盤曲輪は、毘沙門曲輪の北に接する東西に長い曲輪である。秀長家臣の横浜一庵法印にちなみ一庵丸や法印曲輪と称されていたが、柳澤期に常盤曲輪と改められた。東辺と北辺が中堀に、南西部が内堀に面し、北辺以外の法面に石垣を築く。西端は石垣と土塁で画する。南東隅と東辺の塁線上に多聞を築き、南東隅には追手東隅櫓が建つ。他の曲輪境には土塀がめぐる。曲輪の南辺中央付近に梅林門を築く。玄武曲輪と接する辺には、高さ約2mの土塁を構える。

玄武曲輪は常盤曲輪の北東部に位置する。第二次本多期までは納戸曲輪と称されていた。曲輪には西辺の玄武門から入る。南辺に石垣を描く絵図もあるが、現在、石垣は確認できない。曲輪の中央に水堀があり、煙硝蔵が並んでいた。

■二ノ丸・菊畑・大腰掛・松蔵

二ノ丸は、本丸と毘沙門曲輪の南に位置する。正保絵図では「本多内記居所」とある。近世には御殿が設置され、藩の中核として機能した。北辺の表門や裏門から出入りする。南辺が中堀に面し、法面に石垣を築き、砂子ノ間前櫓と坤櫓が建つ。

二ノ丸東部の一段低い部分には、大腰掛と菊畑を設けた。大腰掛は屋形に入る者の控え所である。菊畑は風呂屋敷とも称した。東・南辺が中堀に面し、東辺にのみ石垣を築く。北辺は城郭中心部への進入口である鉄門の枡形に面し、有事の際は横矢をかける機能があった。

二ノ丸西部は舟入堀で区画し、松蔵を設けた。米蔵があり、西蔵とも称された。南辺は中堀に面し、石垣を築く。西辺には低い石垣を、北辺には多聞状の建物や土塀を築いて周囲と区画した。明治初期の絵図を見ると、曲輪の南半には建物がなく、築山状の表現がある。

■緑曲輪・厩

本丸の西に位置する南北に長い曲輪で、北半が厩、南半が緑曲輪となる。正保絵図では一つの曲輪として描かれ、元禄15年絵図では南北に区画される。東辺に沿って五拾間馬場と称する幅広の通路を設け、北端の馬場先門を介して常盤曲輪に連絡する。西辺に松陰堀、北辺に左京堀が面し、松陰堀に石垣を築く。南辺は城内通路に面する。

緑曲輪は新宅とも称され、藩主の国許家族の長男が住まいした。屋敷の詳細を記した古文書が残り、屋敷地には曲輪南西隅に設けた階段を上がって「御門」から進入したことがわかる。

厩には、厩舎に関連する施設を設けた。東西両辺に長大な厩舎が並び、西厩は43間半、東厩は23間あった。他には鞍部屋、釜屋、飼料汲人居所があった。北辺に土塁を築く。

■麒麟曲輪・薪蔵および松陰門・西門・南門

麒麟曲輪は厩・緑曲輪の西に位置する。東辺が松陰堀、北・西辺が左京堀に面する。南辺は城内通路に面し、土塀や建物で区画した。中堀に面する各辺に土塁を築き、曲輪内を外部から遮蔽する。正保年間は侍町、第二次本多期は西の丸とした。公用日記から柳澤吉里が麒麟曲輪と名づけて位牌殿を設置したことがわかり、徳川綱吉を祀っていたと推定されている。曲輪には南辺の門から出入りするが、平時は門を閉ざしていた。

麒麟曲輪南辺に面する城内通路は、城郭中心部分に連絡する松陰門と、外に通じる西門および南門を結んでいる。松陰門は松蔵北西部と松陰堀南端の石垣で空間を構成して設置する。西門は麒麟曲輪の南西に位置する門で、陸橋を通じて城外と連絡する。南門は松蔵の南西に位置する門で、鰻堀と鷺堀を画する陸橋を通じて城外と連絡する。

薪蔵は、麒麟曲輪の南に位置する小さな曲輪である。曲輪には北東部の門から入る。周辺よりも一段低い位置に設け、薪を備蓄する蔵があった。

■陣甫曲輪および鉄門

陣甫曲輪は、毘沙門曲輪の東に位置する。東辺が五軒屋敷堀に面し、石垣を築く。毘沙門曲輪や常盤曲輪より一段低い位置にある。北西隅の梅林門から毘沙門曲輪に連絡する。曲輪の平坦面は内堀水面とあまり高低差がない。城郭中心への主要動線を構成する曲輪で、建物等はなかったようだ。東辺の石垣墨線上に土塀を設置する。

南端には、鉄門を設ける。枡形をとまなう櫓門で、櫓台石垣は陣甫曲輪の石垣と連続する。伏見城から移築したとも伝わる。鉄門には、五軒屋敷堀と蓮堀を画する陸橋を通じて進入する。

(2) 石垣

①分布

郡山城は法面の大部分に石垣を築いており、石垣カルテで 181 面を確認している。石垣は、内堀、左京堀と五軒屋敷付近を除く中堀、城門を構成する枡形の周辺に設けている。内堀の土坡で常時滞水する部分には、水面付近まで低い石積みを設けている。同様の低い石積みは、陣甫曲輪西辺や五軒屋敷堀東辺にも認められる。外堀には石垣がない。

近世の城絵図には石垣が表現されるものが多く、石垣の分布や形状の変遷がわかる。最も古い正保年間と明治初期の城絵図を比較しても、大きな差異はない。正保頃に構築されていた石垣が、近世を通じて大きく改変されていないことを示している。

②石垣の特徴と分類

郡山城跡は、「逆さ地蔵」に代表される転用石材を多用する自然石積み（野面積み）の石垣の城郭として、早くから注目されてきた。城跡内には上記の他にも多様な技法や特徴を持つ石垣があり、こうした石垣の多様性は近世を通じて城郭整備が続いた過程を示している。

石材の加工は、自然石、粗割石、割石、切石に区分できる。石仏や礎石など、本来は異なる用途のために加工された石材を転用した転用石材は、築石として加工したものではないため、自然石と同じ区分に属する。実際はこれらの石材を混用する場合が多く、自然石が主体で粗割石を含む石垣や、その逆もある。割石が主体の石垣は石材種が画一的で、自然石や粗割石をあまり含まない傾向がある。石の積み方には、乱積み、布崩し積み、布積み、落とし積みがあり、勾配は矩勾配が多い。隅角部は算木積みが多いが、大面と小面の使い分けにより細分することができる。

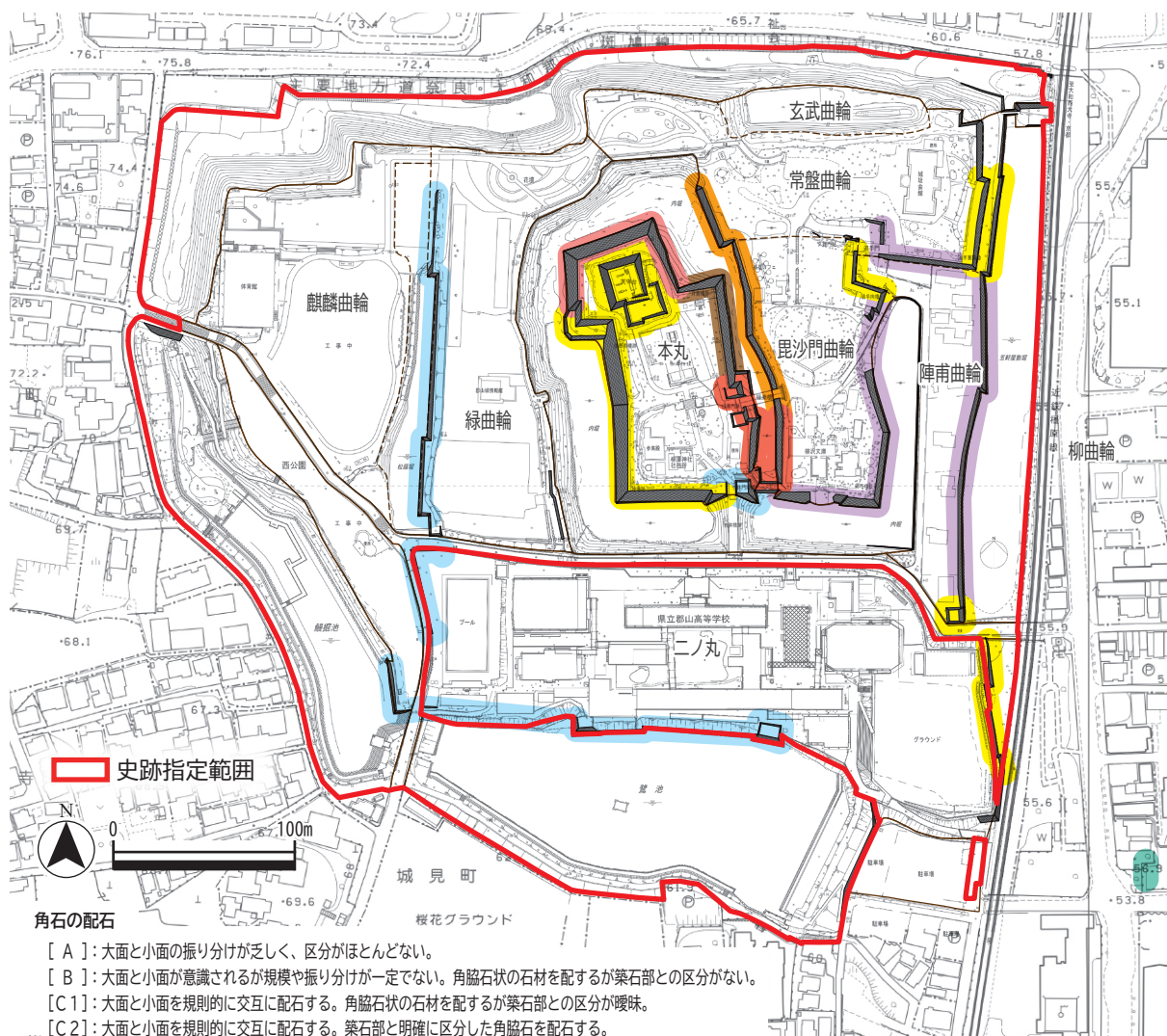
郡山城跡の石垣は、石材の加工度や積み方をもとに図 3-5・3-6 のとおりに分類することができる。分類は構築の年代をある程度反映しているとみられる。

自然石主体の石垣（Ⅰ様式）は本丸周辺に分布が集中し、古い城郭整備に伴う石垣とみられる。最も古相の石垣は転用石材を豊富に用いて直線的な勾配で構築するⅠa様式で、角石は大面と小面の区別がない。天正年間の構築とみられる。天守台付近の本丸東面石垣の北東隅角部付近など、隅角部に初期の算木積みを伴う石垣Ⅰb様式は、文禄年間頃の構築が想定される。天守台石垣の大部分は、角石に粗割石を用いて算木積み状に配する自然石主体の石垣Ⅰc様式で、解体修理の成果から慶長初頭頃の構築とみられる。自然石主体の石垣は他にもあるが、どれも構築年代を示す調査成果はない。近世の修理によるものも含め、今後の課題である。

粗割石主体の石垣（Ⅱ様式）は、毘沙門曲輪や陣甫曲輪を中心に分布する。石材の割面を前面に向けて配石する場合が多く、石垣面が平坦に見える部分が多い。石材の加工度がⅠ様式より進んでいるため、相対的に新しい年代が想定できる。慶長期に次ぐ大規模な石垣整備は、元和～寛永頃の復興期が想定されるが、調査がほとんどおこなわれておらず判断が難しい。

割石主体の石垣（Ⅲ様式）は、一定の大きさに整えた画一種の石材による石垣で、二ノ丸や松陰堀周辺に分布する。近世以降の二ノ丸周辺整備に伴う石垣とみられ、多面に矢穴が多く残る石材の多用も特徴的である。解体等の調査例がないが、城絵図にみられる変遷から、松平忠明が城主を務めた寛永年間を上限として、元禄 15 年を下限とする、寛永～元禄頃の石垣と考えられる。

切石主体の石垣（Ⅳ様式）は柳門東面のみに認められる限定的な石積みである。年代は不詳だが、宝永以降と推定される。



様式	推定年代	積み方	隅角部〔配石方法〕	石材種	築石の加工度	主な箇所
Ⅰ a	天正 (1573 ~ 1592)	乱 (一部崩し)	自然石 [A]	多種	自然石 > 粗割石 (わずか)	本丸天守台付近東面下部・白沢門周辺
Ⅰ b	文禄 (1592 ~ 1596)	乱 (一部崩し)	自然石 [B]	多種	自然石 > 粗割石 (わずか)	本丸天守台付近東面北部
Ⅰ c	慶長 (1596 ~ 1615)	乱	粗割石 [C 1]	多種	自然石 > 粗割石	本丸天守台・鉄門
Ⅰ d	?	乱	割石 [A]	画一	自然石 > 粗割石	常盤曲輪西面
Ⅰ e	?	乱	割石 [C 2]	多種	自然石 > 粗割石 (やや多い)	月見櫓下
Ⅱ	元和～寛永 (1624 ~ 1644) ?	乱 (一部崩し)	割石 [C 1]	画一	粗割石 > 自然石	毘沙門曲輪
Ⅲ	寛永～元禄 (1644 ~ 1704)	乱 (一部布)	割石 [C 2]	画一	割石	二ノ丸・松陰堀
Ⅳ	宝永 (1704 ~ 1711) 以降?	布	切石 [C 1]	多種	切石	柳門

図 3-5 石垣の分類と分布傾向

(S=1/4,000)